

特集□瑩山禪師顕彰碑建立

瑩山禪師に導かれて

ただひたすら夢に生きる

善光寺住職 黒田 武志

深いえにしをふたたび

平成十三年十一月十五日は、私と、家内倫子^{みちこ}にとつて、生涯忘れることのできない尊い日となりました。

紅葉たけなわ、錦に彩られた音羽の山。心あらわれるように遠く澄み渡る碧空^{へきくう}…行く秋を惜しむかの様なそんなひととき、私たち夫婦は感

無量の面持ち、大早^{たいかん}に雲霓^{げい}を望む（ひでり続きに雨を乞う）が如く天下の名刹・京都東山清水^{きよみず}寺^{てら}の境内に待ち受けておりました。

開創は奈良時代、世界遺産にも登録されております清水寺、山号は音羽山、千二百余年前にさかのぼります。その昔延鎮^{えんちん}上人が夢のお告げに導かれ白雲たなびく音羽山、いつしか麓の滝にたどりつきました。そこに出会った行叡居士^{ぎょうえいこじ}

より授けられた霊木。それに千手観音像を彫り、滝の上の草庵に祀ったのが清水寺の始まりといわれます。まもなく、高子妻室の安産を乞い、鹿狩りのため上山した坂上田村麻呂というお方、延鎮上人に出会うことになります。殺生の不正を説かれる上人の教えに深く感動した坂上田村麻呂は、観音さまに帰依し、仏殿を建立、ご本尊十一面観音像を崇めて以来、清水寺は鎮護国家の道場となりました。

奥深く歴史あるこの清水寺、北法相宗のご本山でございますが、実は我が曹洞宗とも、たいへん深い関わりをもっており、不思議な縁起を窺うことができます。

禅という、ひとつの宗教思想を確立した曹洞宗の高祖。みなさまもよくご存知の通り、道元禅師です。禅師の、「尊いけれども高度で難解の教え」を衆生にもわかりやすく説き広めたのが、太祖瑩山禅師です。(瑩山禅師がどれほどの偉業

を成し遂げたお方だったのか：詳しくは、後ほど特筆いたしますが) この瑩山禅師と清水の観音さまは、実は、大層深いご縁で結ばれておりました。

瑩山禅師は、今から六七七年前、鎌倉時代の末、越前(現在の福井県)に御降誕されました。禅師の御祖母さまに当たられるお方をみょうちうば明智優婆夷いさまと申しますが、禅師は、母君のえかん懐観大姉とともに、幼少の頃から仏の心を学び、深く愛され育まれたそうです。

明智さまは、高祖道元禅師さまが大陸仏法の伝燈をになって無事中国留学から帰国した最初の、在家女人の修行者であつたらうといわれています。この明智さまがおられなかつたら、瑩山禅師は、道元禅師とのご縁をもつことができなかつたのではないか：と思われるほど、瑩山禅師の生涯に大いなる影響を与え、人生の道しるべとなり光となつたお方でした。

まだ、瑩山禪師がご誕生になつていないその何十年か前のこと、この明智さまがなぜか肉親の前から忽然と姿を消し、行方知れずになられたことがあつた、その間七・八年、ひと昔という時間になります。のちに、瑩山禪師の母君懐観さまは、その消息を探し尋ね歩かれたという。

その時分、懐観さまが日参なされましたのが、清水の観音さまでした。観音さまに願をかけたれた懐観さまは、明日満願という六日目、路上に小さな観音さまの頭部を見つけハツとしてそれを拾い上げ、大切に両手で包み込み、「もしも御母上さまのご様子がわかるものならば、この観音さまの頭部にお体を与え、永く、深く崇めたい……」と一心不乱に祈ります。そうするとこの、願いは忽ち叶えられ、探しても見つからなかった明智さまと遂に巡り合うことができたといひます。

懐観さまの、明智さまを想う熱き祈りは、音

羽の観音さまに通じ、聞き届けて下さったのですね。

また、なかなかご懐妊の兆しのなかつた懐観さまは数え三十七歳の年、輝く光をのむような夢をごらんになられ、まもなくご懐妊、のちの瑩山禪師を身ごもられていることにお気づきになりました。三十七歳といえば、ちょうど今の、雅子妃殿下が新宮さまをお産みになったときとたいへん似たお年頃です。現代のように近代医学が発達した時代でさえも、慎重になる年齢ですから、今から七百年近くも前のことでは、それはもう、命がけの出産を覚悟せねばならぬ大事であつたと思います。

しかし、何としても、呱呱の声を聞きたい。そして、命に代えても産まれ出でたこの子を世に送り出さなければならぬ！「大善知識となるような、世の光となるよう立派な子を無事産ませいただきたい！」と……。

そう願う懐観さま、越前・多禰（たね）の観音さまに毎日詣でて『観音経』を誦し、三千三百三十三拜という礼拝をつとめ死をも決意しての壮絶な祈り、命がけの誓願でした。

この三千三百三十三拜という礼拝は、三十三体に化身した衆生を済度（心をもつすべての存在を苦しみ・迷いから救い、悟りを得させること）する観世音菩薩の大慈悲にちなんだものです。

こうして毎日祈願して七ヶ月たち、またその日もいつものように多禰の観音堂への道すがら、懐観さまはにわかには赤子が産まれそうな気配におそわれる。そして、歩きながら間もなく安らかに赤子をお産みになられたといいます。境内を歩きながらのご出産であったので、幼名を「行生」と名づけられ、のちの瑩山禪師さまのご誕生となったのであります。瑩山禪師は懐観さまの子であり、そして同時に観世音菩薩の申し子でもありました。

それからは尊い御祖母・明智さま、御母・懐観さまの深い観音信仰に育まれ立派にご成長になり、出家、学文・修道・住持・檀信徒の接待：すべてにわたって観世音菩薩（ここでいう観世音菩薩というのは、祖母・明智さまと清水寺にちなむ、あの十一面観音さまです）に祈誓しうんぐわ蘊奥を授けてゆかれたのです。

やがて禪師は、能登（石川県）に洞谷山永光寺ようこうを開かれますが、その開基は弟子・祖忍尼。このお方は瑩山禪師にとって祖母・明智さまの再来かと思わせるほどの信仰心深くして慈愛に満ち、あたたかな存在でありました。永光寺山内には、かの十一面観音さまを奉納、それを安置する円通院をお建てになりましたのも、明智さまの誓願。また、母君懐観さまの素志を生かして、「すべての女性の悲しみ（この時代、たとえば妊娠・出産においても幼子を育てていく生育環境はきびしく夙にむごい運命を背負う人が

多かったです)から何とか救ってさしあげたい」という祈願を成就するためであり、「女流済度の菩薩」になろうという誓願を發願なされたのです。まさに、この円通院觀音堂こそは、祖母明智さま・母懷觀さまの悲願を実現するための女性の道場であり、それはとりもなおさず、瑩山禪師における仏法宣布誓願成就のための道場でもありました。

禪師はこの永光寺を一生偃息安樂の地になさうと思われましたが瑞夢(たいへん縁起のよい夢)に導かれ、やがて、諸嶽山總持寺となる諸嶽寺の門に入り、辺りを仰ぎ見渡しましたところ、かの清水寺を彷彿させる、靈驗あらたかな聖地であり、魂が清められるがごとくまことに壯觀で、こここそは、仏法の縁が熟した空間であると直感、山門建立を發願されたといえます。

果たして、仏祖正伝の法は、禪師とその門流によって飛躍的・爆発的に伸展することとなり

ました。觀音信仰の篤い禪師は、「放光菩薩」(放光菩薩は、觀音・地藏、二菩薩の徳を備え、これを一体とした菩薩さまです。觀音は円通の徳、地藏は慈悲の徳：というように、慈悲救済を本願として、すべてのものに利益を与える菩薩さまなのです)を置かれて、遍く寺檀の教化、庶民：ことに哀れな悲しみに包まれた女性に慈悲の光と、安堵の仏法を説いてゆきました。

このように思いを馳せてまいりますと、瑩山禪師さまをとりまく方々のご誓願をして、後世にまで脈々と受け継がれてきたその感化力に感嘆せずにはおられません。この尊いお二方なくしては瑩山禪師を語ることはできない：と申し上げても過言ではありません。

清水寺さまとの「縁を報恩顕彰する碑

倫子と私は、かねてよりこの尊い軌跡を尋ね学んでまいりましたが、ことに倫子は、瑩山禪



妙月
心
表
帝
印

師ご生誕の地であります処の越前に生を受け成長したという巡り合わせ、このご縁を篤く思い瑩山禪師さまを、深く学べば学ぶほどに御祖母・明智さま、御母・懐観さま、さらには、我が曹洞宗高祖さまと瑩山禪師さま三代に亘る清水の観音さまの深い仏縁、この奇跡を広く世の人々に知っていただきそして永くその恩徳に感謝し讃えてゆきたいと、なにかしない訳に参りませず、これが碑建立の発願に至ったのでございます。そして…。

一昨年（平成十二年）清水寺ご本尊十一面千手観音 三十三年目の歴史のご開帳と時を同じくして、曹洞宗高祖道元禪師さま降誕八百年、さらには昨年、道元禪師七百五十回忌大遠忌を翌年（今年）に迎えるという、まこと不思議な仏縁重なる千載一遇に、大本山清水寺さまのご理解と總持寺さまのご庇護のもと、この祈願は聞き届けられ、『曹洞宗太祖瑩山禪師と清水の観

音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑』として建立することができたのです。

この記念すべき誓願は清水の舞台を展望する一等地、参詣者で溢れ、混雑のなか、ぶじ除幕の式典を、執行させていただくことができました。

除幕式には、大本山總持寺貫首板橋興宗大禪師猊下、北法相宗大本山音羽山清水寺貫主森清範大僧正猊下にご臨席いただきまして、心あたたかいお言葉も頂戴するという、身に余る光栄をいただくこととなりました。

まずは、板橋曹洞宗貫首猊下お導きの尊い読経。「願わくばこの功德をもってあまねく一切におよぼし、我らと衆生を皆ともに仏道を成ぜんことを…」朗朗と響き渡るなか、除幕の式を順々とすすめさせていただくことができました。

発願主・倫子は、観音さま、瑩山禪師さまへの言上。『啓白文』を奉読。

『謹んで三世十方の諸仏 諸菩薩に奉言し、

諸法の諸天の冥祐を敬仰し奉る。

観音経に示したまいて、

観世音清聖は苦惱厄死に於て、能く為めに依怙と作れり、一切の功德を具して、慈眼をもつて衆生を視たもう、福寿の海 無量なり、と。

度も惟るに、昨年は（平成十三年に読んだものなので、ここでいう昨年とは平成十二年のこと）清水寺御本尊十一面観世音菩薩 三十三年目の御開帳の歳にあたり、また昨年（平成十二年）は曹洞宗高祖道元禪師さま降誕八百年、来年（平成十四年）は道元禪師さま七百五十回大遠忌の歳にあたる。

この佳き千載一遇の仏縁の重なる本年（平成十三年）ここに音羽山清水寺さまの御理解と諸嶽山總持寺さまの御庇護のもと、曹洞宗太祖常済大師瑩山禪師さま、ならびに御祖母、母君三代にわたる清水の観音さまとの奇しき

ゆかりをしるす報恩顕彰碑を建立し、除幕の式典を執行す。

ここに、ひたすら大恩教主釈迦牟尼仏、歴代の祖師の証明を仰ぎ奉る。

伏して冀くは、みなともに仰いでみ仏の教えを信じ、慇懃に供養するゆえんなり。

ねがわくは、うけ給え。

平成十三年十一月十五日

発願主 黒田倫子

謹んで白す』

音羽山清水寺貫主森清範大僧正猊下には、

「本日は錦秋に垂なんなんといたします、この清水寺におかれまして、瑩山禪師さまの記念の供養碑が建立されまして除幕されましたこと、まことにおめでとうございます。

また、施主黒田さま、そして今日は、大本山總持寺板橋興宗猊下のもと、本当に大勢の方々にかうした供養をご随喜たまわりましたこと、

まことにありがたいことと存じております。

うかがいますと、瑩山禪師さま、たいへん当山の観音さまとのご縁が深こうございますようで：さらにこの記念碑が、この当山と曹洞宗とのご縁を篤く深めていただけますものと思っております」

とまことにありがたい、温かいお言葉を頂戴し、そしてまた、大本山總持寺貫首板橋興宗殿下からは、

「まさに千秋万劫というか、秋晴れの良き日に、この天下の名刹清水寺さままで瑩山禪師顕彰の碑を開眼されたというのは、まこと喜ばしいことであります。天下の清水寺と我が宗門は、深いご因縁が結ばれておりますが、今後ますます深められていくということは、法のためにも喜ばしい限りでございます。

ここに至るまで、いろいろと御理解をいただいた清水寺貫主猥下のご厚情ならびにお世話の

方々：そしてまた、これを発願し奉納された横浜善光寺さまならびにそのご寺族の方々には、深く、感謝の念でいっぱいであります。

また、本日は、全国から馳せ参じられた我が宗門のお寺さま方、さらに、ご参詣の方々にも深く感謝申し上げます。

今後とも、よろしく清水寺さまと我が宗門との繁栄を祈念し、ここに祝福を申し上げたいと思っております」

と、ありがたいお言葉、尊い教えを頂戴いたしました。

発願主・倫子も、感極まった様子、

「本日は清水寺さまの破格のご好意で、清水寺の森清範貫主さま、總持寺の板橋禪師さまにお出ましいただきまして、このようなりっぱな除幕式を執り行うことができましたこと：：本當に身にあまる：身にあまりすぎる光栄を感じております。今日ほど、生まれてきてよかったと

いう悦びと幸せを感じたことはございません。本当にみなさま、ありがとうございます」

と感謝と感激の謝意を述べさせていただきました。

そして私もまことに感激、はげしく心は高揚し、押さえることができませんでした。

「高いところから大変僭越ではございますが、ただ今家内のお礼の挨拶に、一言、二言、付け加えさせていただきたく、お時間頂戴したいと申し上げ、重ねて皆様…ことに清水寺の森清範猯下、大本山總持寺板橋猯下、また大西真興執事長さま、森孝忍法務・庶務部長さまに唯々ありがたく心より厚くお礼を申し上げます。

顕彰の碑にも書かれておりますように、このたび建立についてお骨折りいただきましたお方は、駒沢女子大学学長東隆眞先生でございます。本日はどうしても、公務にてこちらの方にはお出ましただけませんでした。皆様にくれぐ

れもよろしくお伝えいただきたいとの伝言を頂戴いたしております、まずもってお伝えし謹んでご報告申し上げます。その名代として、学長のご長男さまにおいでいただき、ありがとうございます。

さて…ただいま、倫子も申し上げましたが、この、日本一の清水寺にこのような大事をさせていただいたことは、すぎたことではなかつたらうかと、また、境内の一等地をお借りして建立させていただいたことにつき…ちよつと大きすぎましたか…と恐縮しながらお尋ねいたしました。が、管長さまにも快く許していただき、瑩山禪師さまのご遺徳に免じて諸々お許しをいただいたものであらうと思ふ次第でございます。

瑩山禪師さまのお母君は、ご存知のように、この清水寺観音さまをたいへん深くご信仰になりました。東隆眞先生からいつの日だったか「瑩山禪師さまも随分お参りなさったことでしょう

ねー」とおっしゃるので、私も「ええ、もちろ
ん、曹洞宗高祖道元禪師さまも親しくこのの観
音さまにお参りなさったんじゃないでしょうか」
と、七百年も八百年もの昔に思いを馳せながら
申し上げます。その同じ地にこうして立って
おりますといまにもそこに禪師さま、居ますが
如くに観じられ感無量でございます。

瑩山禪師さまは、お祖母さま、お母君さまの
遺志を受け継ぎ、女性の救済に努めたお方でも
あります。現代ではあたりまえのことですが、
昔は考え方が少し違っていたのです。いささか
古き悪しき女性蔑視の状況を目の当たりにして
大層お悲しみになっていた、そのご意志を継が
れた瑩山禪師は、「女性を尊重せよ」という教え
をも、私たちに残してくださいました。

私も今日から改めて、女房をはじめ、日本中
のまた、世界中の女性を大事にしていきたいと
堅く心に誓わせていただきました。そしてこの

ようなことを両猊下にもお願い申しあげており
ます(笑)。二十一世紀は女性の時代だと言われ
ておりますから：瑩山禪師の教え通りになって
ゆくかと思われませう。

もう一つ、瑩山禪師さまは、檀信徒の方々は
本心に尊い宝であり、み仏のごとく接せよ、と、
教えてくださっております。

そういう意味からも清水寺さまは、まさに、
そうした方々を大切にしておられ、朝は六時に
門をお開きになる、そして、閉門は、夕方六時
：。朝早く目覚めた方も、仕事が終わった方
もお参りに立ち寄れる。日本全国から年間七・
八百万人もの、参詣の方であふれかえるご隆昌
は、日本中見渡してもなかなかあるものではあ
りませぬ。

そんなすばらしい清水寺様と、この度のご縁
を結ばせていただきましたこと：さきほど板橋
禪師さまにもお喜びでいらっしやいましたが、

宗旨・宗派を超えて結ばれた尊いご縁にさらに感謝申し上げ、私も今後ない力をふりしぼって仏法に照し日本のため、そして世界のために尽くしていきたいと思っております。

清水寺さまの観音信仰がさらに世界にまで広がりますように：また曹洞宗もその徳にあやかり、お釈迦さまに感謝申し上げ、歴代祖師の方々にも厚く御礼申し上げます。そして、このお導きに感謝し応えて全力を尽くすことをかたく心に誓いまして、皆様への御礼の言葉に代えさせていただきます。本当に本日はありがとうございました。」

お礼を言い終え、万感胸に迫るものがあり、震える思いを致しました。

除幕式ののち成就院で行われました祝宴では、ご来賓各位代表さまのおことばもあり、殊に京都府下四百万寺代表宗務所長村上俊鳳老師さまより、

「今日この音羽のそよ風ふく青空の下、とどこおりなく除幕の式を終えられまして、発願主黒田倫子夫人、横浜善光寺黒田武志ご住職にも心よりお祝い申し上げます。観音さまと善光寺の仏縁も深まり、私たちもそのご縁と、観音さまの大きなお徳、大きな法悦を頂戴いたしましたこと御礼申し上げます。名刹清水寺さまと、曹洞宗ご本山總持寺さまとのご縁がこうして深く結ばれ、そして今日のような盛大な除幕式が清水寺で行われましたことは、地元といたしましても光栄に存ずるわけでございます。これまで遠いところにあるように感じておりました大本山總持寺さま、そして瑩山禪師さまと京都の清水寺さまとにこのような深いご縁があることを改めて認識いたしました。今後京都府管内四百万寺檀信徒の皆さまはじめたくさんの方々にも、これを契機といたしまして、ご参詣いただきたいと思いますし、清水寺さま曹

洞宗さまとの絆がより強くなるためにも、この顕彰碑建立にはまことに深い意義がありこれを機に皆様に広く知っていただくことが大切だと思ひますし、感謝し申し上げる次第でございます。

本日は、発願なさいました横浜善光寺のご内室ならびに善光寺ご住職さま、ありがとうございます。今後とも、京都府管内関西管内につきましてもよろしくご導愛いただきたく存じます。

板橋興宗、森清範両猥下に感謝いたしますとともに、観音様のご慈悲によってご縁をいただき、世界の宗教が手を携えて一つになる糸口ではなかるうかと感激しております。」

と、温かく胸にしみいるお言葉をいただきました。

夢に生きた瑩山禅師のお導き

さて、私たちを導いてくださった瑩山禅師さま……ご生誕前後の不思議な観音さまとのご縁はおわかりいただいたかと思ひますので、その後、どの様にご成長なされたか瑩山禅師さまのお姿をお話いたしましたしよう。

幼名を「行生」。元氣でたいへん聡明なお子様でしたが、やはりふつうではありません。遊びよりも、土を練って仏像を作ったり幼少より経典を開いたり、また非常に感受性が強く、短気だったといわれますが、ある時期より仏の心が強く芽生え始めます。数え六歳のとき。母君に連れられ観音さまにお参りし、その慈悲あふれる観音さまのお姿を見て、

「この菩薩さまはどこにいらっしやるのですか、どうしてこのようにみなに尊敬されているのですか」

と尋ねられたそうです。母君は、「まだ豆と麦との区別もつかないような幼子がこのような！」

と、大層驚かれましたが、氣をとりなおして、

「行生や、観音さまは、慈悲深い心をもって、多くの難儀を救う菩薩さまです。むずかしい道理や因縁を説くことは私にはできないが、ただ、この大慈悲の心をたよりに、唯々あなたの成長を願い、我が家の幸せを望んでいます。だからこの観音さまを深く信仰し、毎日礼拝しては、ひたすらにお経を読誦することが大切なのですよ」

とお答えになりました。この言葉は行生の心に響き、観音さまに帰依して出家求道の大志を駆り立てていったと残されております。

以来、日常生活では読み書きに通じ、ひとたび見聞するやすべて記憶し、経文も独学でその意味を理解されるなど、三宝（仏・法・僧）を敬い、お経読誦する修養の毎日が続きました。

この卓越したお姿を見て人々は、「観音さまの生まれ変わり」だと言うほどになっておいでし

た。曹洞宗の高祖である道元禪師もまた、四歳のときから中国古代の難解な詩やお経を読み理解したという天才児であったことから、そのあたりもたいへん似ていらっしやいます。

さて、八歳にして出家の志をご両親に申し出られた行生さまは許されて、永平寺（道元禪師開創）の第三代住職を継がれた義介禪師のもとで修行を始めます。十三歳のときには、義介禪師の師である懷奘禪師に就いて菩薩戒を受け、正式な僧侶となりました。まもなく、高齢のため懷奘禪師は入滅され、遺命を受けた義介禪師のもとで再び真剣な禅修行が行われることとなりましたが、ともあれ仏弟子となって、道元禪師の優れた高弟お二人から深い仏縁を結ぶことができたというすばらしい環境に恵まれました。

そののち、求道心はさらに深まり、五年ほどたちいわゆる青春時代ともいえる若き日々、宝慶寺の寂円師の元へ、さらに京都に上って万寿

半井田半井田住職西田武正大和郡 師衣(シキモノ)

シキモノ

脚絆

三本杖



わらじ

木白 筒杖但導師が持つ



鈴

寺、東福寺で臨濟禪を学びのち、比叡山にのぼり天台教學を、そして紀州由良の西方寺（後の興国寺）へ…禪師自らこれらを述べる記述が充分でないので、はっきりとしたことは申せませんが、ともかく、あまた他山にものぼり、他宗の善知識にも師事、さまざまなご体験と学びを深くして視野を広げ大いなるご修行をなされたと思像できます。

このように、西へ東へ、野へ川へ…師を尋ね道を学ぼうとする禅僧を「雲水」と申しますが、僧侶を志す者にとつて、自ら体験し、修行して越えねばならない欠くべからざるプロセス、私も若き日々、とてつもなくきびしかった全国行脚そんな雲水時代を経験させていただきましたので、この頃の青年僧瑩山禅師の心境を、恐れ多いこととは思いますが、僅かでも感じとることができるとは思います。

各地を巡りながらやがて二十一歳の秋。永平

寺に戻られた禅師は、翌年、大乘寺を開創し、義介禅師に師事され、加賀の地に移られました。義介禅師のもとで厳しい修行を積みながら、二十七歳のとき、「深く真の仏法に達した」と、師から認められるに至ります。

「平常心是道」。これは、中国唐代の僧 趙州 從諗禅師が、その師・南泉普願禅師との問答によく用いられる言葉です。「道とは何です」との問いに、「平常心」と応え、その奥深い意味を趙州禅師は一瞬にしてとらえ、悟りを開いたという法話です。

これがいったいどういう意味のことなのか… 義介禅師もまた弟子たちに問われたとき、瑩山禅師ただ一人、「わかりました！」と応える。「黒い玉が暗闇の中を飛んでゆくようなものです」

義介禅師が静かに微笑んでさらに意味を問うと、瑩山は、

「お茶を飲むときはお茶を、ご飯をいただくときはご飯をおいしくいただくこと…あたりまえの日常のことを素直にあたりまえに実行することです」

とお答えになったという。これこそ「平常心是道」の極意。この答えを聞いた七十七歳の義介禪師は大層によろこび瑩山に向い、

「なんじはもう私を超えている。我が永平祖師の宗風を継承するがよい」

と正式に許可されたというのです。

平常心：私たちは、毎日の多忙な生活の中で、「日常茶飯事」の一つ一つにとらわれたりこだわりにふり回され、なにか自ら窮屈な常識や標準や規範をつくって縛られたり、身動きできないくなっているのではないでしょうか。仏教や禅は、そんな窮屈な思いせずとも、人間はもともと自由であり、解放されていると教えています。また或る禪師が「禅とはなにか」と問われたと

き「眠くなれば眠る、腹が減れば飯を喰う」と答えたという。ともすれば眠くないのに眠ろうとしたり、空腹でないのに食べようとする、これなどは、平常心是道に従っていないことになる。申し上げますように、勝手に自分の規範にふり回されていることになりはしませんか。私の女房など『ああ眠れない』などと寝言を言うことがあります。実に可愛しくて罪がない、どうでしょう。

坐禅：これは、「悟り」を得るための真髄ともいえます、が、坐禅のかたちにとられない禅を日常生活の中においても、実践してゆくことができる：瑩山禪師さまは宗風を大衆化されたといわれておりますのも、このようにむづかしい仏教の教えを広くわかりやすく衆生に教えてくださいださったことがあげられると思います。

「平常心」の悟りによって禪師は、人々を教化する資格を得、以後、道元禪師の「正伝の仏

法」を世に広め、曹洞宗發展の原動力として精力的な活動が展開されていくこととなりました。

曹洞宗高祖道元禪師さまがご在世だった鎌倉時代は、殊に戦乱や政治の乱れにより人々の不安が大きくなっていった時代でした。それだけに人々は強く心の救いを求め、そんな人々に応えべく衆生の救済というお立場から、すべての人は仏であり、すべての人は仏になりうるとして大いなる救いの手を差しのべられ、仏の教えを一般の人々にわかるものにしようとお努めになられたのが瑩山禪師さまなのであります。さてその師道元禪師さまはまず自分を磨き、「仏教の真髄とは何か」「永遠不変の本当に正しいものは何か」を自分の内に向かって問いてゆき、「本当に正しいことを理解する『眼』、つまり『智慧』を持って」と、後進の弟子たちを指導していきました。瑩山禪師は、その尊い教え「正法眼蔵」を、僧だけでなく、救いを求めるすべての衆生

に伝えそれを普及するという夢を実現されたのです。

そしてその夢：誓願は、次々に成就、道元禪師の蒔いた尊い種に、水をやり育み花開かせるに至りました。どちらの祖が欠けても、今の曹洞宗はあり得なかったでしょう。

我が曹洞宗では、仏教の開祖、お釈迦さまをご本尊として礼拝し、お釈迦さまのご慈悲の心を日本に正しくお伝えになった道元禪師を「父」、瑩山禪師を「母」とし、（これは、父のように厳しく、母のように優しいという意味ではありません。両祖あつて宗門ということですが）、また道元禪師を「高祖」、瑩山禪師を「太祖」として、両祖大師を崇めて奉る、他宗にはない「宗祖にあたる方が二人」という特色を持つに至ったのです。ですから、両祖大師とならんで、奥深い永平寺、海をひかえた街に近い總持寺という、二つの大本山があるのです。

瑩山禪師は入滅なさるまで半世紀を、ただひたすらに道元禪師の仏法を花開かせることに身を投じ夢をもって駆け抜けました。そして、二十世紀最後の年となる地球の節目ともなる一昨年（平成十二年）、瑩山禪師が生涯を賭けた師、高祖道元禪師ご生誕八百年を迎え、二十一世紀が始まろうとする今年（平成十四年）に七百五十回遠忌を迎えることになりました。

私には、「現代社会をよく見渡せよ。道元禪師さまの教えを今一度真剣に学ぶことが必要な時代に入っているんじゃないかい？」という、瑩山禪師のお声のようにも感じられてならないのです。

また、ちようどご生誕と大遠忌法要を迎える年のはざまにあたる昨年（平成十三年）、先にも申しましたように、「仏心とは大慈悲心これなり」と説いた瑩山禪師さまの心の芽を息吹かせた御祖母明智さま、御母懷観さまとのゆかりを記す

報恩顕彰碑を、深いえにしで結ばれた清水寺さまに建立させていただくことができました。このうえは仏弟子として、私共夫婦そして関わる皆様とともにさらに精進致しまして、道元禪師の真の仏法を未来永劫脈々と世界の隅々まで届けられるよう粉骨碎身、さらには私の信念を繼承して伝えていつてくれる仏教者の育成こそ、私に課せられた永遠の課題と受けとめ、これに徹することが瑩山禪師の心を継ぐ者の使命だと思っております。

生涯私利私欲を捨て、ただひたすらに夢に生きた瑩山禪師。私たちもいつか必ず夢を実現する、という信念さえもっていれば、やがて高祖さま太祖さまの余徳をして必ずみ仏のお導きはあると信じています。私にも、今後どのような困難が待ち受けましょうとも普遍的に法灯を燃やし続け夢に生き、誓願に生きる人生を駆け抜けてまいりたいと思っております。